



A T S U O

O K A M O T O

—— 岡 本 敦 生



岡本 敦生 | ATSUKO OKAMOTO

1951年 広島市に生まれる
1977年 多摩美術大学大学院彫刻科修了
1989年 第2回朝倉文夫賞受賞
1994年 第12回ヒロシマアートグランプリ：ヒロシマ国際文化財団美術奨励賞受賞
1996年 第27回中原悌二郎賞優秀賞受賞
1997年 第24回長野市野外彫刻賞受賞
1999年 TUES賞を受賞：美ヶ原高原美術館(長野)
2002年 「東日本-彫刻」展・ステーションギャラリー大賞

主な個展

1983/85/87/89/91/93/95/97/99/00/03年 ギャラリー山口(東京)
1987年 ギャラリー上田ウエアハウス(東京)
1988/90年 ギャラリーホワイトアート(東京)
1991/93年 ギャラリー山口SOKO(東京)
1991年 ギャラリー上田SC(東京)
1992/93/96/98年 ギャラリー絵門(名古屋)
1993年 小西ギャラリー(京都)
1997年 「地殻-太古の海より」水の国 Museum104* (桜江町/島根)
アート・アフェアーズ(アムステルダム/オランダ)/1998 プラス/マイナス財団(ルネッセ/オランダ)巡回
1999年 TUES1999-現代彫刻の展望 - 岡本敦生：美ヶ原高原美術館(長野)
2003年 伊勢現代美術館(三重県)
2004~2005年 「岡本敦生-堆積」水の国 Museum104* (江津市/島根県)
2008年 「岡本敦生・FOREST」：ギャラリー東京ユマニテ、ギャラリー山口(東京)
2010年 「Faraway mountain」岡本敦生：Corn Exchange Gallery(エジンバラ/UK)
2011年 「Forest」岡本敦生：Chelsea College of Arts & Design(ロンドン/UK)
2014年 「excavation」岡本敦生：ギャラリー東京ユマニテ(東京)
2016年 「遠い記憶」岡本敦生：いりや画廊 (東京)
「excavation/発掘」岡本敦生：ギャラリーせいほう(東京)
2017年 「水を彫る-2017」岡本敦生：伊勢現代美術館(三重)
2021年 「CALDERA」岡本敦生：ギャラリー東京ユマニテ(東京)

国際彫刻シンポジウム&アーティストレジデンス

1978~2006年 日本・ドイツ・オランダ・スウェーデン・ニュージーランド・韓国・アメリカ
2009~2014年 イギリス

主な企画展

1981年 第15回現代日本美術展：東京都美術館・京都市美術館
第9回現代日本彫刻展：宇都市常盤公園(山口)/1985 第11回/1991 第14回 /1995 第16回/2005 第21回
1983年 現代美術の新世代展：三重県立美術館(三重)
第3回ヘンリー・ムーア大賞展【エミリオ・グレコ特別優秀賞】：美ヶ原高原美術館(長野)
1986年 第5回浜松野外美術展：中田島砂丘 (浜松/静岡)
1987年 トウキョウ ウォーターフロント・フェスティバル：三菱倉庫(東京)
1988年 現代美術 動きの表現：埼玉県立近代美術館(埼玉)
横浜フラッシュ：三菱倉庫(横浜)
1989年 地・間・余白 - 今日の表現から：埼玉県立近代美術館(埼玉)
1990年 第12回神戸須磨離宮公園現代彫刻展【土方定一記念賞】：神戸市須磨離宮公園(兵庫)
現代彫刻の歩みIII『1970年代以降の表現-物質と空間の変容』：神奈川県立県民ホール(神奈川)
1991年 現代日本美術の動勢- 立体造形：富山県立近代美術館(富山)
神奈川アートアニュアル'92：神奈川県立県民ホールギャラリー(神奈川)
1992年 ENCOUNTERING THE OTHERS展(カッセル、ハンミュンデン/ドイツ)
1993/1996/1998/2000年 現代美術の磁場'94：茨城県つくば美術館(茨城)
1995年 クールの時代：高知県立美術館(高知)
美術の内がわ外がわ：板橋区立美術館(東京)
1996/2000/2004年 コラボレーション：岡本敦生+野田裕示展：ギャラリー山口、ギャラリーユマニテ東京(東京)
雨引の里と彫刻：大和村(茨城)/1997 第2回 /1999 第3回 /2001 第4回 /2003 第5回
開館45周年記念 [I] 手の復権 道具と美術：神奈川県立近代美術館(神奈川)
1997年 コラボレーション：岡本敦生+野田裕示展：愛知県美術館(名古屋)
1998年 インサイド/アウトサイド-日本現代彫刻の8人：新潟県立近代美術館(新潟)
サントリー美術館大賞展98挑むかたち：サントリー美術館(東京)
2000年 天野純治・岡本敦生-痕跡：米子市美術館(鳥取)
2002年 東日本 - 彫刻：東京ステーションギャラリー(東京)
倉橋アートドキュメント2002臨界域：倉橋島倉橋町(広島)
2003年 表象都市metamorphosis広島：広島旧日銀(広島)
2004年 音戸アートスケープ・ゲニウスロキ：音戸町(広島)
2006年 Sculpture Internazionale ad Aglie 2006 国際美術展(トリノ/イタリア)
2009年 Milestone & project：Edinburgh College of Art(UK)、翌年巡回展：Yorkshire Sculpture Park (UK)、Pier Art Center (UK)
2012年 "Turtle project" Atsuo Okamoto：Art First Project(ロンドン/UK)
岡本敦生×平戸寛児 Vol.2：メタルアート ミュージアム(千葉)
2015年 "FINDING FORM"展：Art First(ロンドン/UK)
2017/2015/2011/2009/2007年 ART SESSION TSUKUBA「磁場-地場」(つくば市)
2019/2015/2013/2011/2008/2006年 雨引の里と彫刻：桜川市 (茨城)

岡本 敦生「穴を彫る - 2022」

自作について述べることは、得意ではない。さもそれなりに書き連ねた途端、自分の中で文字に転化することの嘘 がバレてしまうのだ。カッコ良く 書けば書くほど嘘を連ねることになる。出来るだけ素直な気持ちで、ネットブログ に書き込む様な気張らない気持ちで、自作を語ってみよう。私は嘗てより、秘められた空間に興味を持っていて、様々な形で石の中に空洞を作る作品を制作してきた。棺桶のような「記憶体積」シリーズ(写真-1)だったり、生命の痕跡として太古の海水を蓄える「CRUST」シリーズ(写真-2)、人が入る事の出来る「COCOON」シリーズ(写真-3)、折り鶴を入れる「UNIT」シリーズ、ドリルで穴を空けた「fossil」、石が息を始める「Excavation(発掘)」シリーズ(写真-4)だったりした。大学を卒業した頃から手掛けていた、高密度空域(水)に入り込む球体や立方体、円柱や角柱のシリーズ(写真-6)も作り続けて来た。ここ10年程、石に開けた穴に嵌まりまくっている。自分で明けた穴に嵌まり込んで抜け出せなくなっているのだ。「穴 or 坑」とは？物質に空けられた空洞？時空に開いた異空域？言い方は色々あるのだが、何れにしても穴、空域という概念が成立するための最低条件として、穴が開けられる媒体が不可欠であることに間違いはない。その媒体とは？すなわち穴を空けられる母体なのだが、穴を開ける対象としての石だったり、木だったり、コンクリートだったり、トンネル坑を開ける大地だったり山だったりする。逆に言うと媒体の無いところに、穴という概念も存在しないのだ。穴を成立させるためには穴を穿つ母体が不可欠なのである。もう一つの条件として、穴は、穴のある媒体(母体)を主体として認識するという時系列が必要なのだ。すなわち目の前に山が存在するという事実を前提として認識しているからこそ、そこに掘られる空洞を穴として認識できるのだ。逆に、空洞を主体として認識していたならば、山は空洞の周りにへばり付いた媒体(地面など)の集合体という事になってしまう。穴の中には何が充満しているのかというと、空間もしくは異物質が充満する。それは空気だったり、水だったり、モノだったり、はたまた真空だったりするのだが、母体を構成する物質ではないモノが母体の中に入り込んでいる現象である。もし、その穴が無くなることがあるとすれば、穴という概念を成立させている媒体が無くなるという事、もしくは媒体を構成している物質が穴の中に充満し媒体と同一化してしまった現象だと言うことが出来る。そこで私の彫刻観からの欲求として、物質に明けた穴・開いた坑を穴として発掘してみたいと思った事である。物質の中に入り込んでいる穴 or 坑の空域を彫刻として彫り出す事を試みたくなったのだ。実に矛盾しているのだが、物質をして空を発掘し彫り出すこと。空間を彫り出すという事は、最終目的として目に見えない穴の形状、空間の形状・空気やエネルギーの形状というか、それが彫り出された時がお見事！完成という事になる筈なのだが……。完璧に空洞が彫り出された時、今まで穴を成立させていた媒体も、穴という空域も含めて、その概念自体が全て消滅することになる。だから抜け出せない、陥穽に嵌まってしまうのだ。嘗て設置した広島国際空港のモニュメント・「地球・一つの球体のために」(写真-5)の円柱作品も、近年制作を再開した「水を彫る」(写真-6)や、「カルデラ」と題した角柱屈折作品も、地球や大地や水という媒体に入り込んだ穴の物質エネルギーとしての円柱や角柱が、穴の主体として彫り出された形状だとすれば、私の中で全てが結び付いてくる。

2022 年に入ってから一作目の制作を開始する。石に空けた穴を、見えない側から発掘する作品である。目に見えない石の中の空洞や、その空洞の方角や形状を掘り出すことに興味があって、自作のゲームに嵌まってしまったオタクの様に、自ら開けた穴を、自らが発掘するという、何とも我が儘な作品を作り続けている。下の写真(写真-7)が、今回用いた大きな玉石の原石である。先ずはこの玉石に私が任意の穴を空ける事から始まる。その坑は 3~3.2cm 径で 0.6~1m の深さになるが、向こう側に突き抜ける事はない。石の中で止まった穴なのだ。次に、その穴の行方を石の反対側から掘り出す。坑が通っているはずだという記憶を頼りに、その坑の方角や長さを坑の入り口から計算し、正確な補助図面を石の上に描いて、坑の位置を割り出しながら、坑が見えない石の内部へと彫り進むのだ。自分が掘り出している四角柱や円柱の芯には、間違いなく坑が通っているはずだ、という感覚を信じながら彫り出して行くわけだ。円柱や角柱を先に作ってから、その中に坑を通せば簡単なのだが、細い角柱や円柱にドリル坑を通す事は、100%不可能だ。だから原石の時に坑を空け、その開いた坑の行方を、見えない石の内部から掘り出すやり方しか方法は無い。(写真-8,9) その何所が面白いの?? と聞かれる。ただ単なる自己満足、もしくはスリル?

2 作目の作品コンセプトが固まって来たのに伴い、仕事場で制作を開始した。今回も穴を発掘するコンセプトの作品を進めるため、先ずは石に穴を空けることから始める。大きな玉石をセットして、その石の回りに数個の補助石と脚立やビール箱を配置し、それに足場板を組んでから、その足場板に登って穴開け作業をするのだ。削岩機(エアドリル)で玉石の芯に向けて穴を開けるのだが、この不安定な作業には、クレーンのフックに吊した安全帯が不可欠である。作業中にバランスを崩し、何回か落下する羽目になったのだ。坑を一本開け終わったら、次に開ける坑の開け口が上に来るように石を回転させて、先程明けた穴の先端に向けて、次の穴を開けて行く。見えない石の中で穴を繋げていくわけだ。(写真-10) その繰り返しで、慎重に角度を計算しながらの穴開け作業は、1日2本から多くて3本が限度だ。この作業に使う削岩機とは、25kg オーバーの機関銃の様なハードなマシンで、エアコンプレッサーから太いホースで供給される大量の圧搾空気を使い、けたたましい音を伴って装着したロッド+ビットを打撃回転しながら坑を空けるというハードなマシンなのだ。(写真の削岩機に捲いている筒状のプラスチックは、私が作った消音装置)。今、自分を取り巻く世界は、不条理で悲惨極まりない戦争や、目に見えない悪玉ウイルスが蔓延っていて、それら全部を標的に、削岩機でバリバリと撃ち続けるのだ。その重いマシンをキープする私の左足脛骨の一本は、9年前の癌治療で顎の形成に使ってしまったから、左脚は脛骨一本でバランスを保たなければならない。毎日サーカスの綱渡りの様な作業を続けている。フト思うんだけど、こんな作業って、70歳を過ぎた障害のある爺さんのやる作業じゃないよ!!。でも・・・やんなきゃ自分の想う作品は完成しないし、自分の念う世の中にもなっていない。待てよ、こんな作業が出来ているという事は・・・、ひょっとして私は未だ若者? なんて苦しい妄想を繰り返しながら、日々淡々と制作を続けるのでした。



[息を彫る - 2022 “sculpt a breath - 2022”]
H86×W112×D97(cm) / 玄武岩の玉石





[穴を彫る-2022-2 “excavateahole-2022-2”]
H31×W80×D36(cm) / 黒御影石



[穴を彫る - 2022 “excavate the hole - 2022”]
H72×W125×D111(cm) / 玄武岩の玉石







「石の案山子」 “Kakashi” / H11.5×W13×D15(cm) / 小松石
 「息の空穴2022-1」 “breathinghole2022-1” / H8×W11×D11(cm)
 「方形の空穴」 “cubic cavity” / H11×W13×D9 (cm) / 白御影石
 「息の空穴2022-1」 “breathinghole2022-1” / H8×W15×D12(cm)

「息の空穴2022-3」 “breathinghole2022-3” / H8×W15×D13(cm)
 「息のかたち」 “a shape of breathing - 2022” / H11×W21×D12(cm) / 白御影石
 「方形の空穴-2」 “cubic cavity-2” / H9×W8×D7.5(cm) / 白御影石



会場風景



会場風景